

# 佑 啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## アゲイン

堀金 兼太郎

私は佑啓会の広報委員として編集に長いこと携わらせて頂いておりますが、一面への寄稿は初めて。この紙面は理事の方や施設長が代々書いてくださっているもので、私も本年度から市川市松香園の施設長を拝命し、この順番が回ってきた。は何を書くべきかと悩みながらも締切日に第一稿を提出したところ、あえなくボツ。編集作業は輪番で事業所ごとに回しており、本号の担当施設長から全文書き直しを命じられた。多分、一面でこのような事態は長年この編集作業に関わっている身としては記憶にないもので、それほど酷いと言わざるを得ない。枕から自らの無能をさらして恥ずかしいが、言い訳半分グチ半分ということで文才のない私の駄文に、しばしお付き合いを。



実は私は佑啓会で働く前まで市川市と松戸市で育った。松香園の歴史を紐解けば丁度、私が物心ついたころからこの地にあり、そして私は何度か松香園の前の道を自転車や車で通ったことがあった。が、存在を全く知らなかった。そしてふる里学舎で働くことになり、地元を離れて仕事をし、縁あって現在に至る。なので仕事で移動するときは道に迷う事はないし、法人内の職員が口々に言う「市川は道が狭くて車を運転したくない」という感覚も全くない。なにせ自動車教習所の路上教習の段階からこんな道しか走らないのだから。しかし実をいうと私とてハナから地元を離れようと思っていたわけではないのだが・・・

もともと福祉に無縁な学校を卒業し、就職氷河期のおおりを受けて、というより自分が何をしたいのか分からぬまま根無し草でブラブラしていた。当時のバイト仲間が福祉系の学生で就職説明会があるから行こうというところになつてどうせやることもないので待ち合わせて行つた。しかしその仲間は待てど暮らせど会場に來ず、いよいよ閉会間近、折角だから一つくらいは話を聴いてみようと思いたまたま一番空いていた佑啓会のテーブルに向かったというだけ。なるほど面白そうだなと思って受験することとなったが、時を同じくして地元の広報誌に近所の障害者施設が職員募集の記事を出していたのが目についた。へえ、じゃこつちも受けてみようと思し込んだ。受験日は後者が先で、面接だけであつた。いろいろと質問をされる。「動機は?」「ボランティアの経験は?」などだったと記憶している。しかし途中からは何だかお説教されているように感じた。「福祉を目指すのに何でボランティアの経験もしていないの?」「あなたが生きているほど簡単な仕事じゃないのよ」などなど。結果はもちろん不合格。そりゃそうか、ぶー太郎は福祉に向かないのか。ああこの分じゃ、佑啓会もダメだろうな。と思ひながら、ふる里学舎へ。当時の私は小学校の遠足でマザー牧場に行つて以来、千葉市から南に行つたことはなかった。内房線に乗るのも初めてで、電車本数のあまりの少なさに驚いた。午前の筆記試験(当時は何と英語や数学など今にはない試験内容であつた)を通過し、いざ面接。最終面接で今の理事長に他の施設は受

けたか尋ねられ率直に結果も含めて答えた。それに対し理事長は声を出して笑つたあと「経験なんてなくても良いよ」と言ってくれたのを今でも覚えてる。



結果は合格し、どうせフリーターならすぐにも佑啓会にきて働かないかと誘つていただき、地元を離れ十一月から働き始めた。何てよい職場だと感動していたが、しばらくして真実を知つた。実は当時の佑啓会はオープン二年目でスタッフもまだ少ない状況。十一月八日に迫つた利用者一泊旅行に人手が足りないという事で、言つてしまえば渡りに船だっただけの話。つまり旅行が終わつてしまつたら不要な人材だったかもしれないと考えると、何とも乱暴な話である。



月日は廻つて、これまた縁で佑啓会が市川市の指定管理者として松香園を運営することになった。私にとっては故郷に錦を飾るとか、凱旋という気持ちは一切なく、実は今でも不合格がトラウマになっているような気がする。いつも値踏みされているのではないかと、あ

なたにこの地で福祉が出来るの?」そんな風に考えてしまう事もあるのだ。しかしそれは利用者やご家族だけでなく、指定管理者制度のなかで運営内容が常に評価の対象となっている事にも一因があるように感じる。



指定管理者制度は簡単に言うに公立施設のまま内容を民間法人が運営するということ。元々は民の活力をもつて、柔軟性・弾力性のある運営をすることが目的だが、実情はそれをなかなか発揮できない側面もある。仕様書という「これをしなさい、これ以外はだめですよ」という結構厳密なルールブックのようなものが存在する。私はこのルールの中で、最大限出来ることに知恵を絞っている。「佑啓会が来たからつて、何も変わつてないじゃないか」そんな風に言われることもなくはない。例えばこのご時世、土曜日や祝日も年末年始も運営するのは民間の努力である。しかしルールブックには土日祝日は休業となつていて、それでも不定期ながら週末余暇活動やりたいよね、と現場から声が挙がれば役所へお伺いを立てて依頼書を書いてという段取りを踏んで(でも役所はよく理解してくださつて、大体は快諾してくれる)何とか運営している。もちろんそれでは足りない部分や松香園単体では解決できない事、例えば週末の余暇やレスバイトサービス、ご家族やご本人の状況の変化による緊急的な短期入所などは法人全体でサポートされている。

そのような背景から最近是指定管理者制度ではなく、民間移譲という流れが多くなっている。こちらは完全に民間に渡してしまふので、もちろんその後も一定の関与はあるが、ルールブックは独自で作ることとなる。



この四月から佑啓会では、元は県立施設でありその後指定管理者制度において運営されていた「アドバンスなうら」を移譲という形で運営させていただくこととなった。

思えば佑啓会の創設経緯からこの県事業団出身者が多い。そういう意味では私が地元に帰る以上の意味合いを最近の四月オープンに向けた空気からひしひしと感じる。

折しも年度末、毎年この時期になると松香園では市による利用者アンケートが実施される。値踏みの結果と言つてはやや乱暴だが、若かりしあの頃とは違う。私には佑啓会という根つこがあるのだから。

(ふる里学舎松香園 施設長)





## 四十四歳の自立

志関 繁子

平成二十四年八月から、ふる里学舎静風荘にお世話になっております。志関秀彦の母、志関繁子と申します。

主人のリタイアに合わせ、平成二十一年に長男である秀彦と夫婦の老後の為に室内を車いすで生活できるように改装し、車もリフト車に買い替えました。これで安心、秀彦もできる限り慣れ親しんだ作業所に通って、三人で無理せず穏やかに暮らしていければと明るい気持ちでおりました。

しかし、平成二十二年の秋に次男夫婦の勧めで受診した人間ドックで主人の胃がんが見つかり、入院・手術、術後の通院が続く親子三人での生活が続かなくなりました。親元から離れた生活をしたことがなかった秀彦でしたが、当時通所していた市川市の作業所梨香園、地域生活支援センターのCan、短期入所施設のやまぶき園等にお世話になりながらの生活を余儀なくされ、今までと全く違う環境で毎日不安でパニックの日々だったと思います。



私も主人の体調と秀彦の心配が重なり不安な日々でした。次男家族が力強く支えてくれ、また

皆様に助けていただきながら一人となつてなんとか乗り越えてきました。

当初はできる限り早く元の生活に戻れるように療養を続けてまいりましたが、私自身の入院等が重なり、梨香園の小出園長のお力添えによりふる里学舎静風荘への入所が決まりました。

未来像として入所は考えていなかったが、どんな所なのだろう？食事や体調管理は？秀彦は安心して暮らせるのか？等の不安は尽きませんでした。が、静風荘にお世話になる日々の中でその不安は一つずつ小さくなっていきました。

自然豊かで穏やかな環境、館内の清潔さ、職員の皆様の明るい挨拶や入所者に対する細やかな観察、食事の工夫、季節のイベント、体調の変化を密にご連絡してくださり病院に連れて行って下さるなど、本当に静風荘にお世話になることができて良かったと感謝する日々です。

秀彦自身も入所当時は痩せた身体調を崩したり皆様に「心配をおかけしましたが、今では静風荘での生活に慣れ体調も安定し穏やかに暮らしております。職員の皆様の並々ならぬご尽力のおかげであると思います。言葉のない秀彦に代わって家族一同感謝を申し上げます。次第です。ありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

あれよあれよという間に秀彦の入所が決まり、喪失感とたえようのない罪悪感を感じていた私達夫婦に、次男夫婦が「お兄ちゃんはいきなり死んでしまったら、自分のお金(年金)で生活が出来るようになっただね。自立したんだよ。老夫婦が面倒を見るより元氣な職員さん

に囲まれている方が刺激があつて良いのかもしれないよ。これからはなるべく会いに行けばいいんだよ」と言ってくれました。障害のある我が子に自立という言葉は無縁だと思っていました。が、言われてみれば自立という言葉が一番合っているのかもしれない。ありがたいことです。



手術で四年後の秋に残念ながら主人は亡くなってしまいました。が、秀彦の心配が必要なくなったことに安心し、感謝しております。主人と一緒に毎月秀彦に面会に行つたことも良い思い出です。

今でも一緒に暮らせない寂しさや世話ができない心苦しさを感じることがありますが、面会に行くことと笑顔を見せてくれ、手弁当を食べてくれる姿を励みに、なるべく面会に行つて家族の思い出を積み重ねていきたいと思っています。

自立してから四年。桜が咲くころ秀彦は四十八歳になります。

(ふる里学舎静風荘利用者家族)

人にやさしく

嶋田 圭



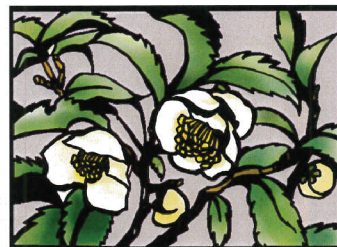
「人と関わる仕事がいいたいなあ」とただ漠然とした気持ちで応募し、縁あつてふる里学舎で支援員として働かせていただき、早十二年が

過ぎようとしています。

私は、周囲を田んぼに囲まれ、夏は蛙の合唱が響き渡る、南房総(三芳村)の自然豊かな環境で育ちました。小学生の頃にユキエさん(仮名)という知的障害のある四〇代の女性がいました。ユキエさんは夏でも冬でもマスクをして帽子を被り、街中を一日中歩いて過ごしていたため、私の同級生は「気味が悪い」と彼女を見かけると走って逃げていました。しかし、私の母はそんなユキエさんを気にかけて話を聞くことで、ユキエさんから「ねえさん」と呼ばれ、慕われていました。父は教員で、障害のある子どもにも健常者の子ども達と同じように卓球を教え、朝練と一緒に走る姿を見て育ちました。私は大学時代に社会福祉を専攻していなかったため、採用されるまで恥ずかしながら福祉の知識がほとんどありませんでした。入職当初はびっくりするような出来事や、戸惑うことも多くありました。しかし、障害の有無に関わらず、分け隔てなく人と関わる両親の姿を見て育ったため、障害者の方への心の壁はあまりなかったように振り返ります。

ふる里学舎では福祉や保育の仕事を目指す学生さんを受入れて頂いています。私が実習担当をさせて頂いた時のことです。初めての施設実習のため学生さんは緊張と不安でいっぱいでした。独り言や同じことを何度も聞いてくる利用者さんを見て「怖い」という感情が先にたち、泣き出してしまふ学生さんもありました。学生さんに理解して頂けるように丁寧に行動特性を説明すると緊張の糸がほどけ、実習最終日の反省会では「少しではありますが障害のことが

理解でき、施設のイメージが明るくなりました。保育を目指していましたが、福祉の仕事も選択肢に入れたと思います」という言葉が頂くことができました。実際に卒業後にふる里学舎で一緒に働くことになった職員も多く、大変うれしく思います。



この十二年の間に、結婚し三人の子どもにも恵まれました。現在は六歳、四歳、一歳の男子三兄弟です。子どもは無条件に可愛いです。子どもができて学舎に預けている親御さんの気持ちが改めてわかったような気がします。そんな大切な人を私たちは預かるわけですから、愛情を持って接しないといけません。自分の子どもと重ね合わせ、どうしたらわかつてもらえるかどうかしたら毎日楽しく生活できるか」という視点も持つことができた。私自身、この仕事をさせて頂いたことで成長することができ、大変やりがいを感じています。しかし、ひと苦手な業務があります。障害支援区分の認定調査です。支援区分が高く認定されるほど、利用できるサービスが広がり、事業所の収入も増えます。支援区分を高くするにはできないことを強調しないといけない仕組みになっています。しかし、我々は実際に現場で利用者さんのできることを少しで

も増やそうと日々試行錯誤を繰り返していますので、これはできませんので、支援を要します。これもできません」とマイナスマスを強調することは、とても恐ろしい気持ちになります。できないことに目を向けるのではなく、その人が今までで日常の中で少しずつ培ってきたことを評価し、支援するのが私たちの本来の仕事だと考えます。

四月からは佑啓会で運営することになったふる里学舎蔵波(アドバン)ながらに異動となる予定です。引き続き利用者さんが安心して毎日楽しく生活ができるように、父のように分け隔てることなく、母のように温かな目線で、ふる里学舎蔵波の利用者さんふる里学舎の利用者さんと同様に愛情を持って接していきたいと思っています。

(ふる里学舎 支援員)

## 編集後記

今年は例年以上に朝晩、寒暖差がある冬で、利用者も職員も体調管理に苦慮しています。まだ、寒い日もありますが、春を感じる事の出来る日も多くなりました。梅、寒桜が咲き始めた季節の移り変わりと共に佑啓第九十五号をお届けします。

支援員 坂本 浩也